



奴隷志望

野崎はるな編







私は野崎はるな
大学を卒業してIT企業に就職したOL
だけど、その毎日と同じことの繰り返し
ロボットのような生活を送っていた

そんな日々の中刺激を求めていたからか
いつの間にかこんな歪んだ性癖を持つ
ようになっていた…



こんな時に仕事…
無視しようかな…



…メール？



奴隷募集中

なにこれ…



でも…
仮に詐欺だとしても
ほんの一瞬でも退屈な
日々を抜け出せるなら…



気づいたら
私は返信を送っていた…



へえ…給料も出るんだ？
なんか自分を売り物にするみたい

怪しすぎる…
絶対詐欺だ

その夜は馬鹿馬鹿しくなって
すぐ寝てしまった

事が動いたのは
次の朝だった

ドーンポン

ドーンポン

…?

こんな朝早くから…
誰?

私が玄関を開けると

大人びた雰囲気的女性が
立っていた

野崎はるなさん
ですよ？

は…

はい…

奴隸士心望

野崎はるな編



私…
何してるんだろ…



私は会社に無理を通し
しばらく有給を取った

今は例の女性と一緒に
高級車に乗って
何処かへ向かっている

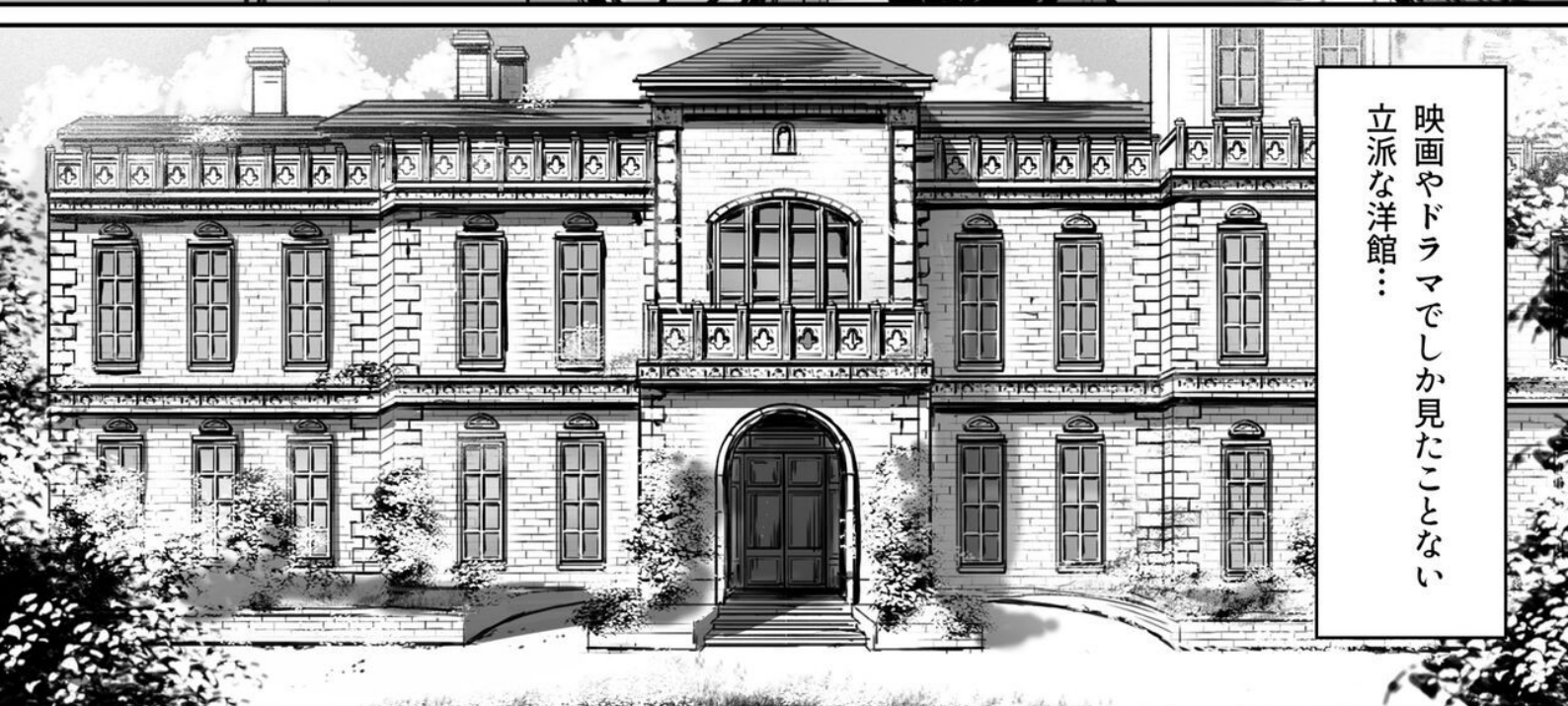


その時は「はい」と答えたけど
正直まだ信じていなかった



彼女はメールのこと
そしてこれから自分がどうなるのか
分かっているか、改めて私に確認した







その中に一歩踏み入れた時
私は確信した

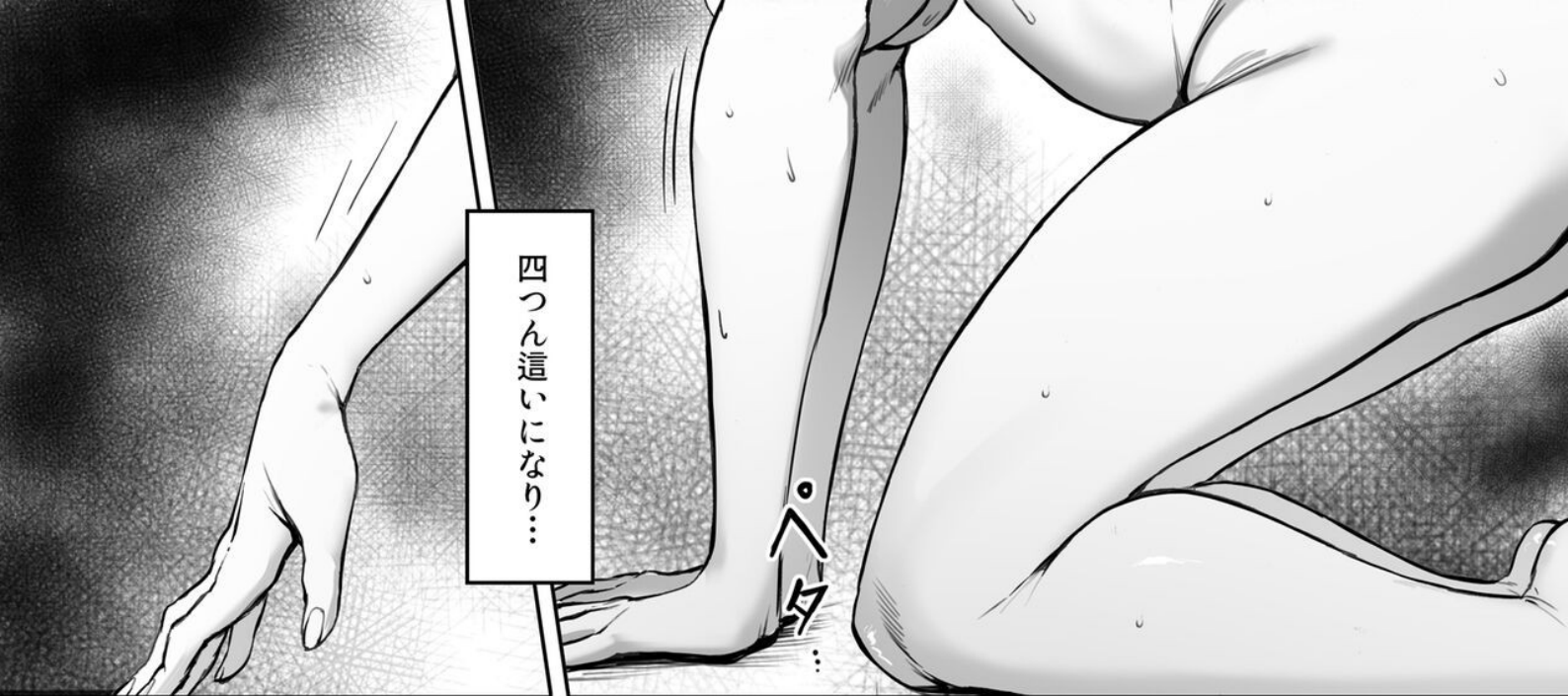
ここが
外の世界とは
違うということを



服を脱ぎ捨て

自ら首輪を付けて

彼女は入るや否や





すまない
驚かせてしまったね

階段から低い声が
聞こえてきた

彼女はその声に反応し
駆け寄るように速度を上げた

ブル



来たのは
どうやらこの館の主のようだ

この子は欲しがりなんだ
失礼を働いたなら謝ろう

よしよし
いい子だ

ナゲ

はー♡

はー♡

彼の声は落ち着きのある
紳士のような声だった

状況が飲み込めていなかった

いえ…

私と同じ
まるで機械のように見えた女性は

今では獣のように主の
前でヨダレを垂らしている…

その姿を見て
すぐに分かった…

あれは紛れもない
『雌』の表情だ…

は♡

は♡



その顔を見て
つい想像してしまう…

ここにいたら…

は〜♡

はあ



私もこうなるのか…
なれるのか…

明らかに常識とはかけ離れた
光景だった…
嫌悪感で満たされても
おかしくないはずなのに…

それどころか
彼女に憧れのような感情を
抱いていた…

は〜♡

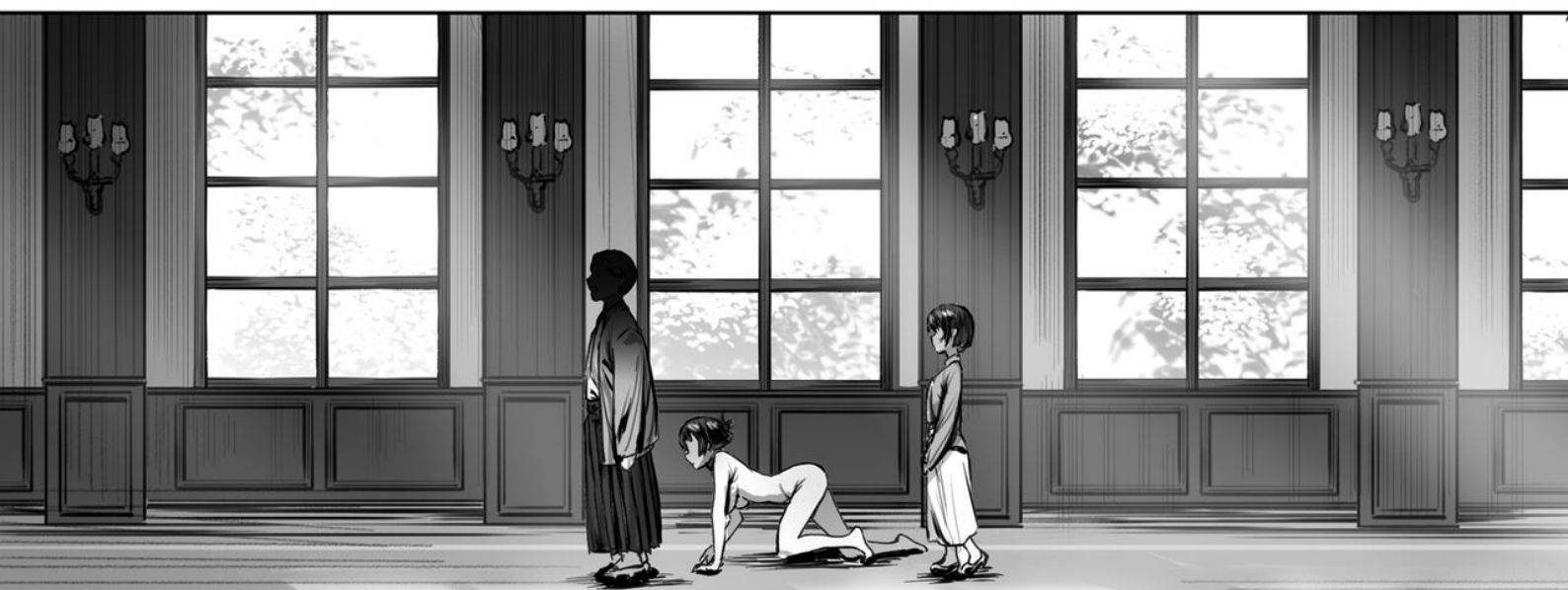


は…はい



話は聞いているね
質問もあるだろうし
少し2人で話そう

私は主の案内の下
館を歩く



廊下を歩いている時

ふと視線を横に向けると



他の女性たちと目が合った

みんな幸せそうに手招きする
ようにこちらを見ている

彼女達のまなざしを
受けた私の頭に

自分がそこに並ぶ姿が
刹那によぎった

私は主の部屋で話を聞いた



ここにいるのは主と同じ趣味を持つ女性たち
あまりにも常識から外れた行為のため
街から遠いこの場所で生活しているとのこと

各々の趣味に合わせて
主の奴隷として主に尽くす
それが彼女達がここにいる理由



とはいえ
本当に奴隷になるわけではなく
いつでも辞めることができる

ここにきた以上は
私もその1人になる権利がある

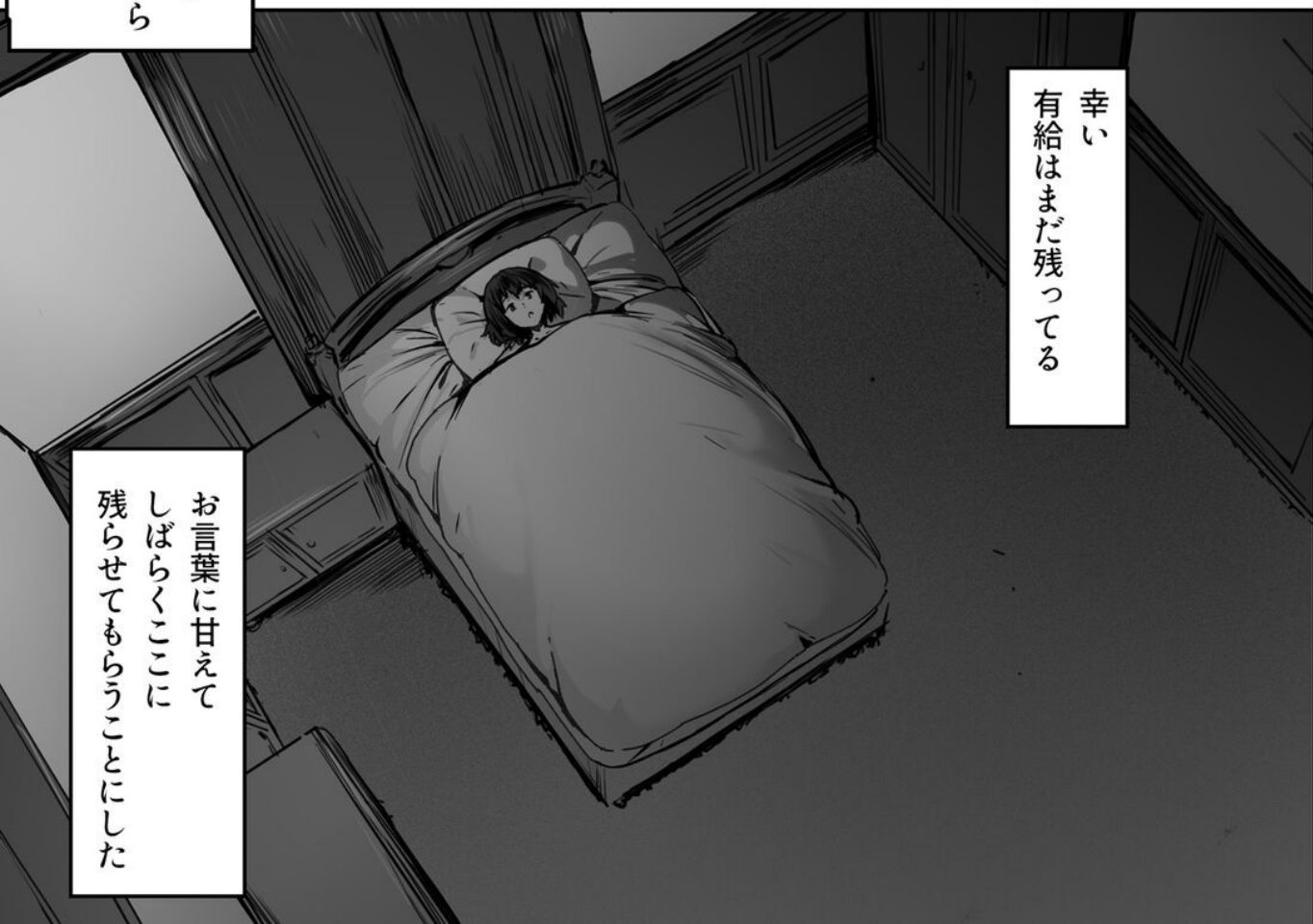


しかし
いきなり言われて二つ返事で
返すこともできないだろうから
しばらくここで暮らして
考えるといい

こうして出会えたのも何かの縁
その間は最大限のもてなしをさせてもら
うとのことだった

幸い
有給はまだ残ってる

お言葉に甘えて
しばらくここに
残らせてもらうことにした





久しぶりに元氣を取り戻した
気がする

後は
このまま元の生活に帰るか
ここに残って奴隷になるか

そろそろ決めないと……

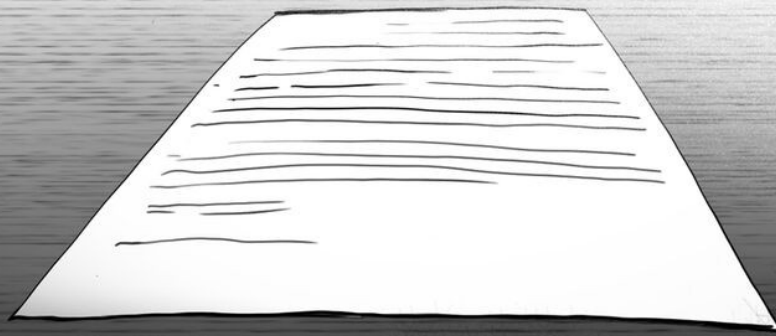
でも

もうとっくに答えは出ていた



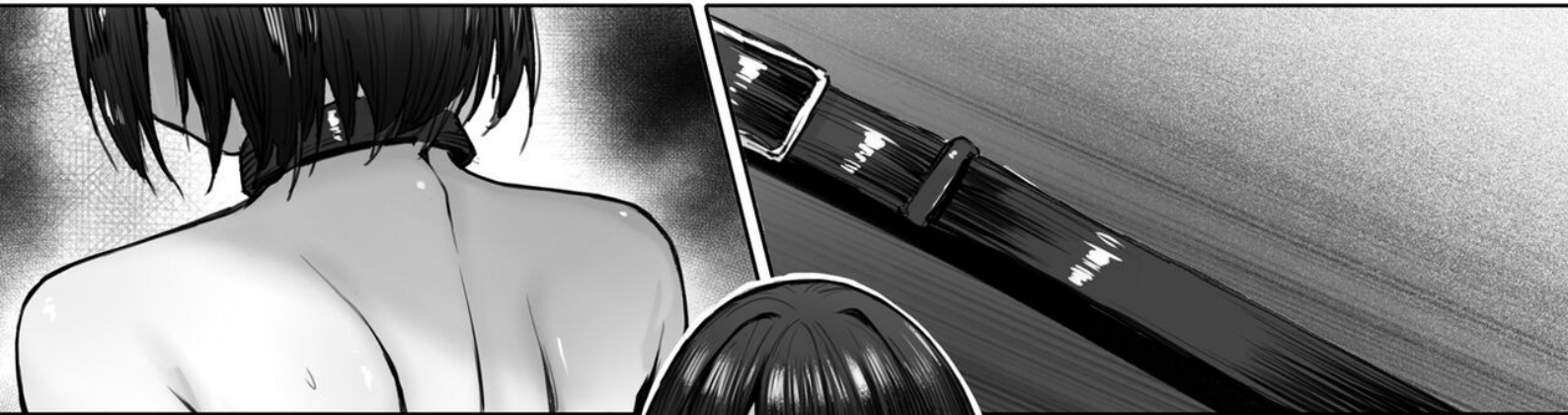
この館で暮らす間に見た
幸せそうな奴隷さん達の表情

それを見て
今更帰りたいなんて思えなかった





あ…違った



こうして

私の見習い奴隷としての生活が始まった

首輪をつけて
外に出ると

1人の奴隷さんが
迎えに来てくれていた

彼女は16号
私の教育係だ

彼女は私に微笑む

私を
もう新しい仲間と認めて
くれているようだった



初めての…
裸で歩く感覚

ここにいと
むしろ服を着ている方が
おかしいみたいだった

ブル



今は
とても開放的だ

館の案内を
受けていると



偶然
主と会った



16号はすぐ
挨拶をする



私もそうしたいが…
体がまだそれを覚えていない



「君はまだ見習いだ
これから覚えていけばいい」

主はそう言ってくれた

その優しい言葉を聞いて
緊張がほぐれた



これから私は
あの人の奴隷になるんだ





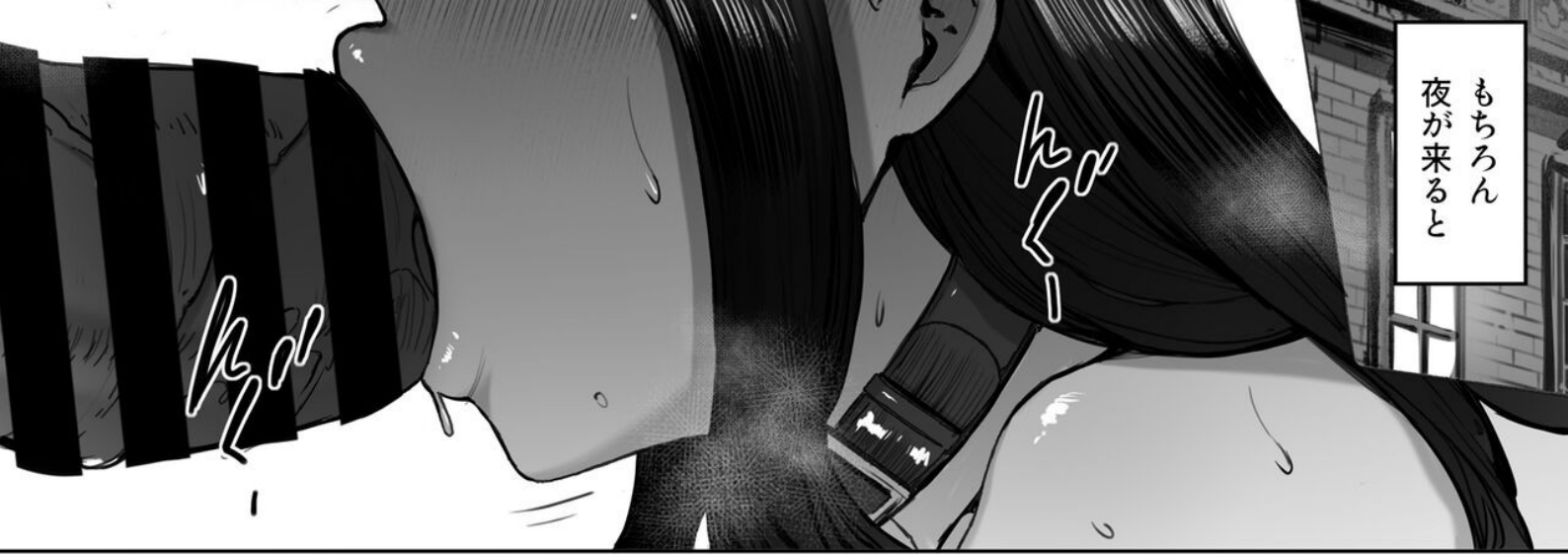
その後
私は正式にここの作法を学び



自分のすべてをさらけ出すことに



いつしか疑問すら
抱かなくなっていた



もちろん
夜が来ると





初めて『本物』を見た私は
緊張のあまりぎこちない
動きになってしまった



主はそんな私に対しても
丁寧なやり方を教えてくれた

ご奉仕は
普通のセックスとまるで別物



手は使わず
動物のようぐうに口でする

最初におちんちん
全体を舌で舐めまわし



主におねだりする



何度も何度も
ねぶっていく内に

おちんちんの形と味は
私の脳に刻み込まれた



主が領いたら
それは満足してくれた合図



ここから
本物のフェラチオが始まる

奴隷はご主人様の道具
指示なく動くことは許されない



ご主人様のおちんちんを
喉奥までゆつくりと差し込み



そのまま舌全体をねっとり
絡めながら引き抜く



はじめは苦しかったけれど
次第に身体が慣れてきて

今では
私の口はご主人様専用の
オナホになっていた



ペースが正しいことを
褒めてくれた



ご主人様は私の頭を撫でて



そしてついに



初めての
精液の味は
至高だった



主は
また頭を撫でてくれた



初めてなのにこれほどとは
上出来だ

奴隷はご主人様から頂いたものを
全て受け取らなければならない



私は一滴残らず
飲み干した

これが
奴隷さん達が味わってる幸せ……

はー



私は見習いだから
できるのはここまで

この後は先輩の奉仕を
見学する



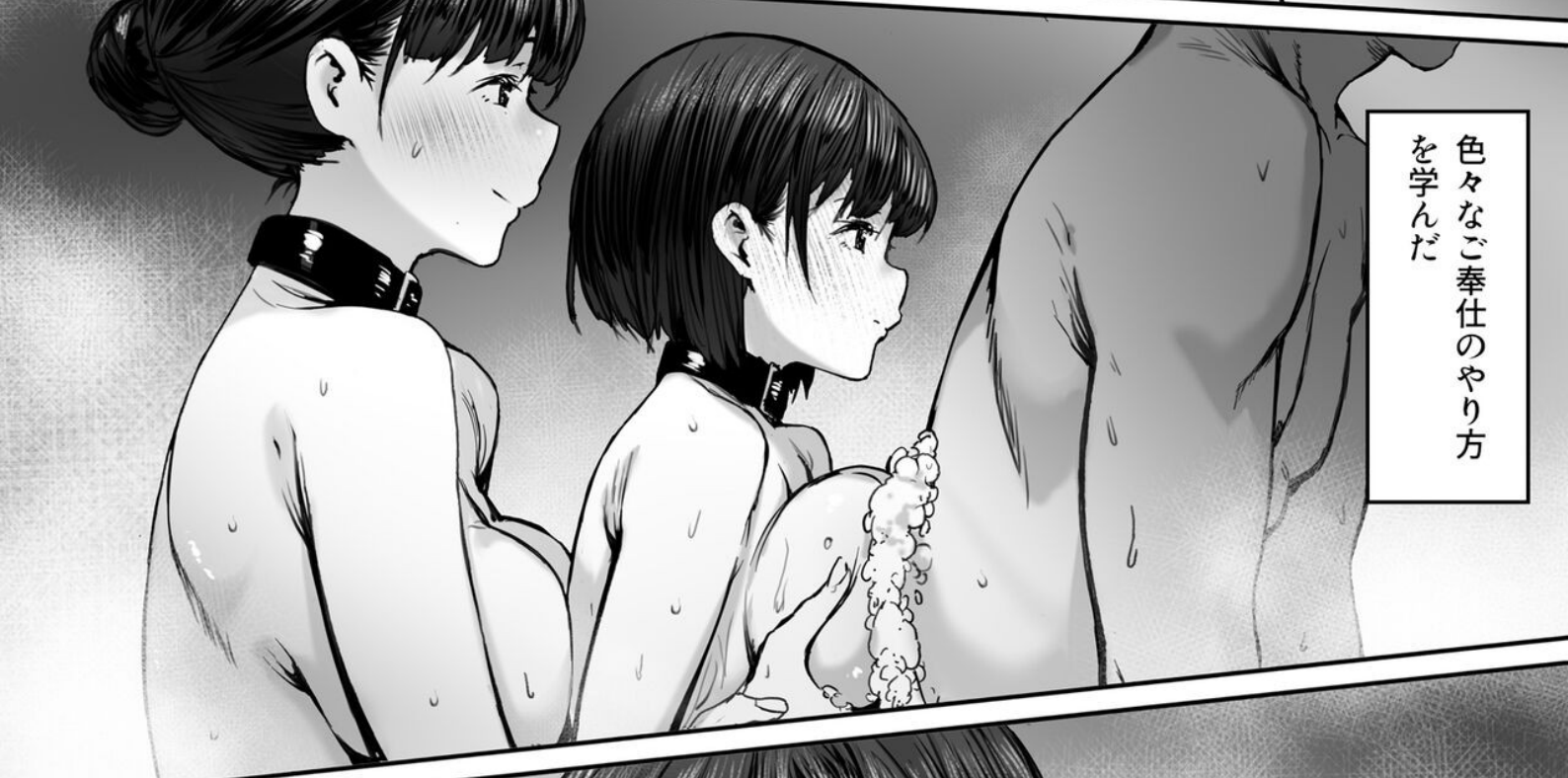
動画で見たのと同じ景色が
目の前で起きている

見ているだけで
子宮が下りてくるの
が分かった





こうして私は先輩たちから
指導を受け



色々なご奉仕のやり方
を学んだ



しかし…

本物の調教は



はーッ

うん

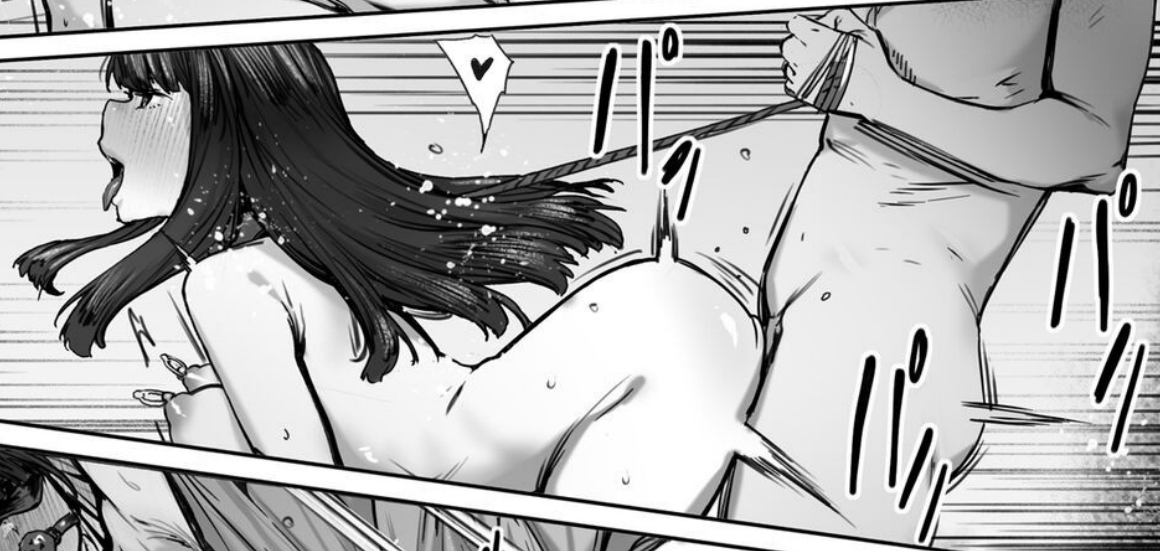
見習いでは受けられない



主は調教とは
奴隷とはどういうことか



それを見てもまだ奴隷に
なりたいか
私に問う





どんなに辛そうなことをされていても
彼女達はいつも幸せそうに主を見つめている

…私もこうになりたい

朝私は家事を学び



夜は調教を見学する



もう無理矢理取った
休みは終わった

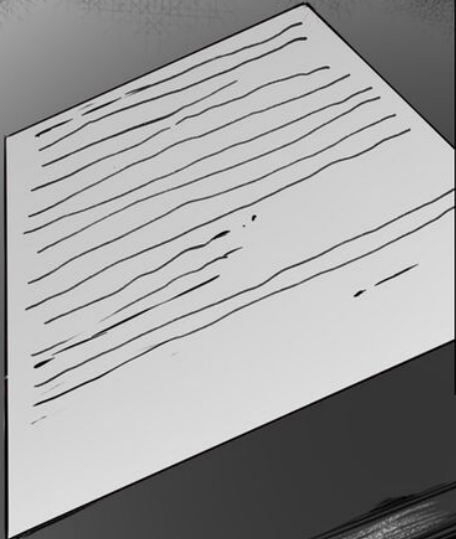


そんな生活が
かれこれ二週間続いた



私はこれから...





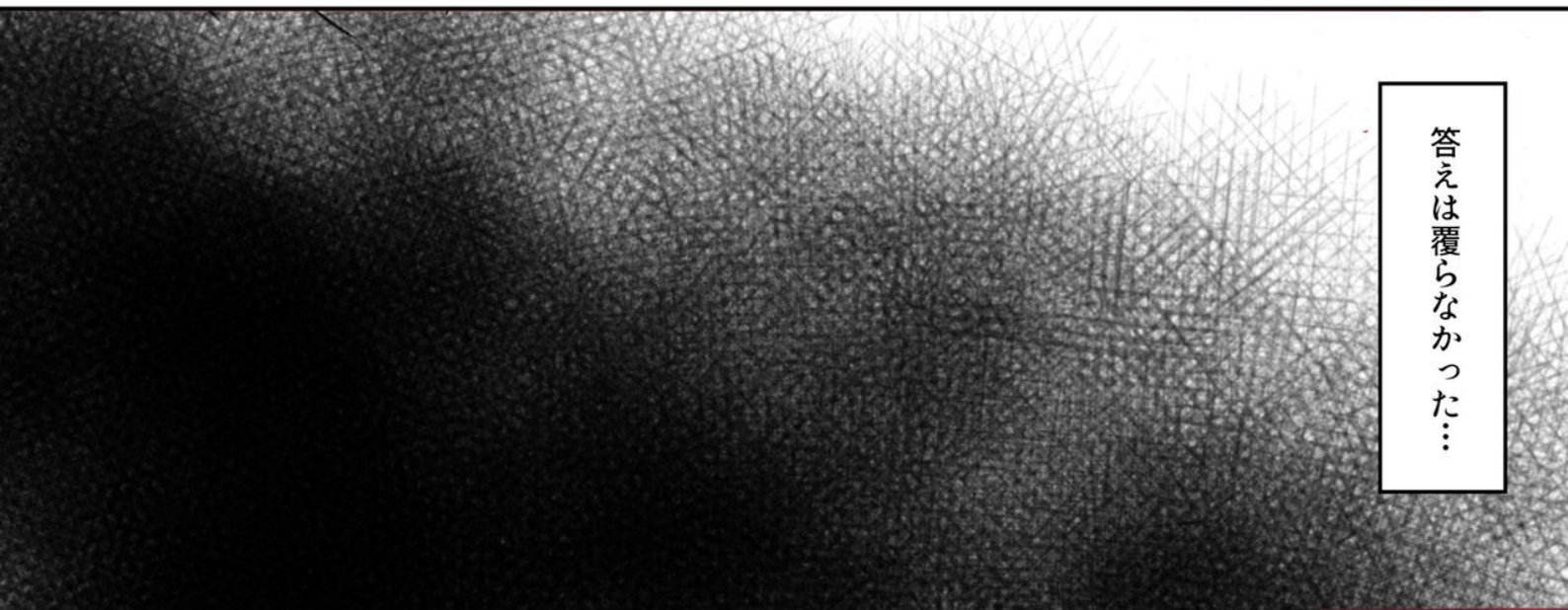
館に残って
奴隷として生きるか…



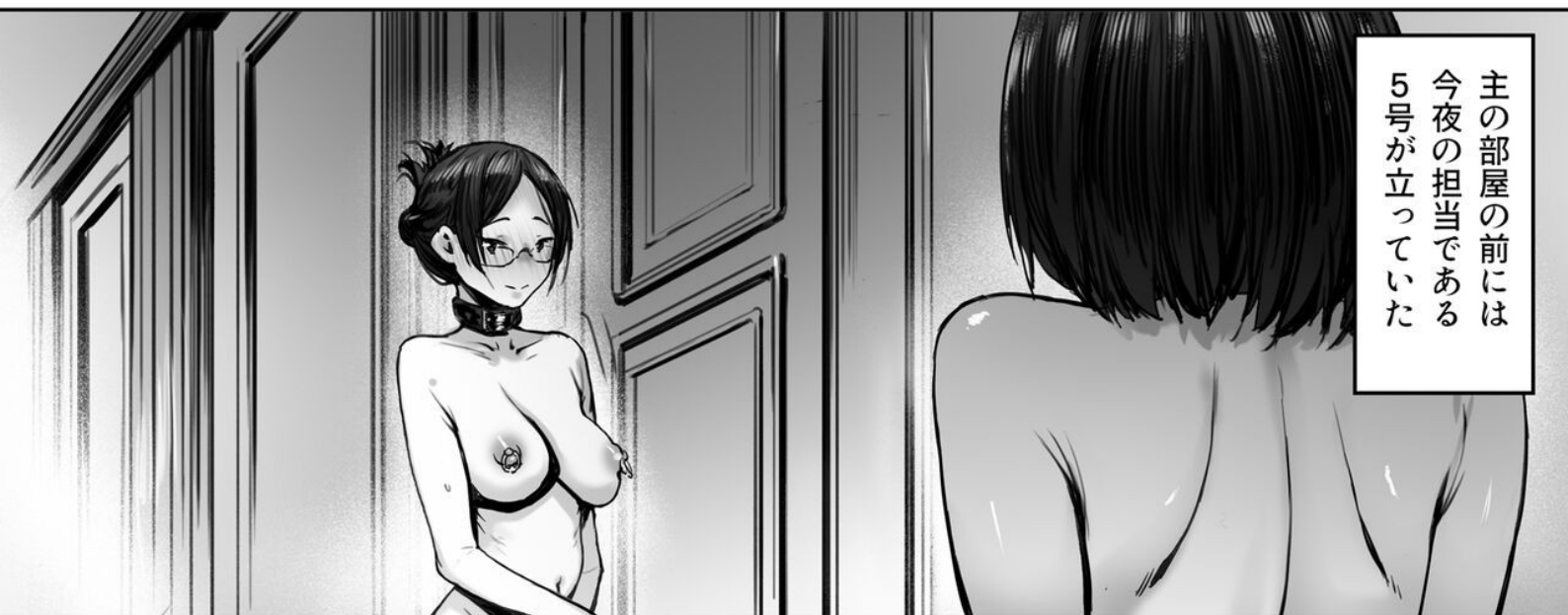
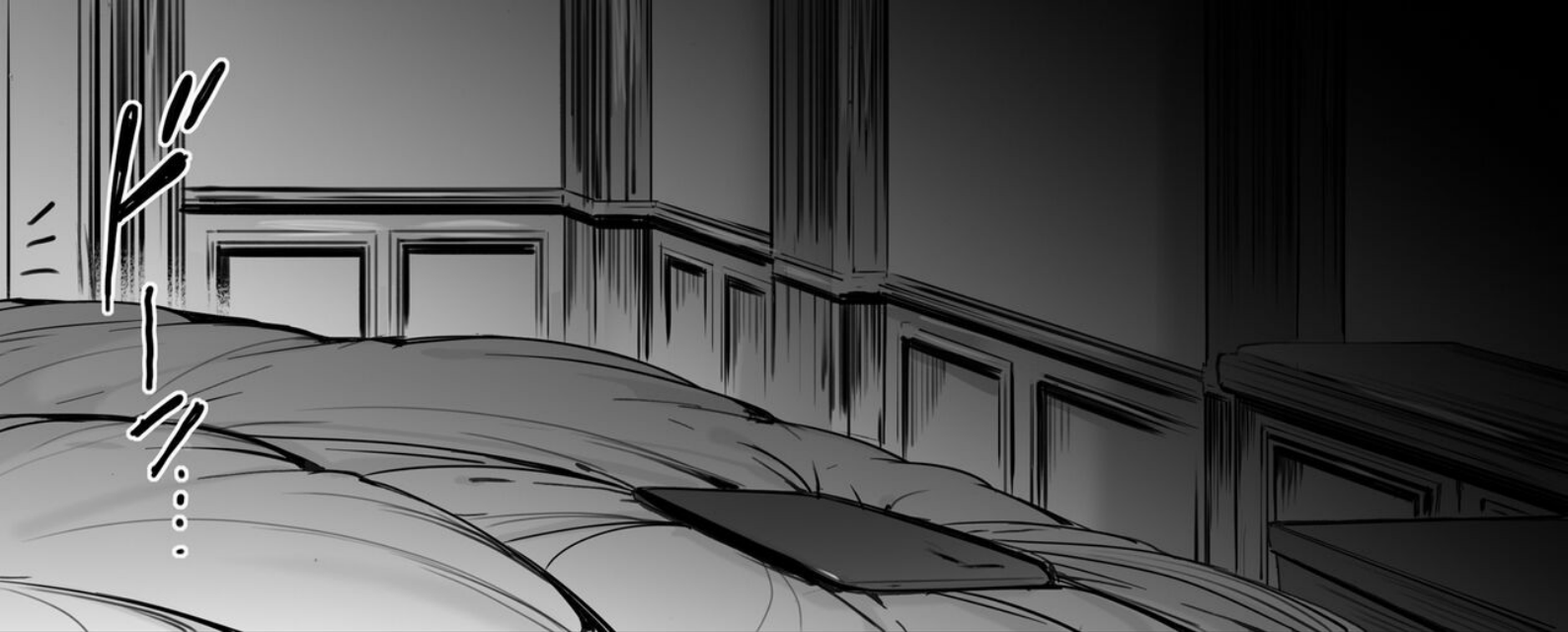
今から帰って
あの生活に戻るか…



今さら



答えは覆らなかった…

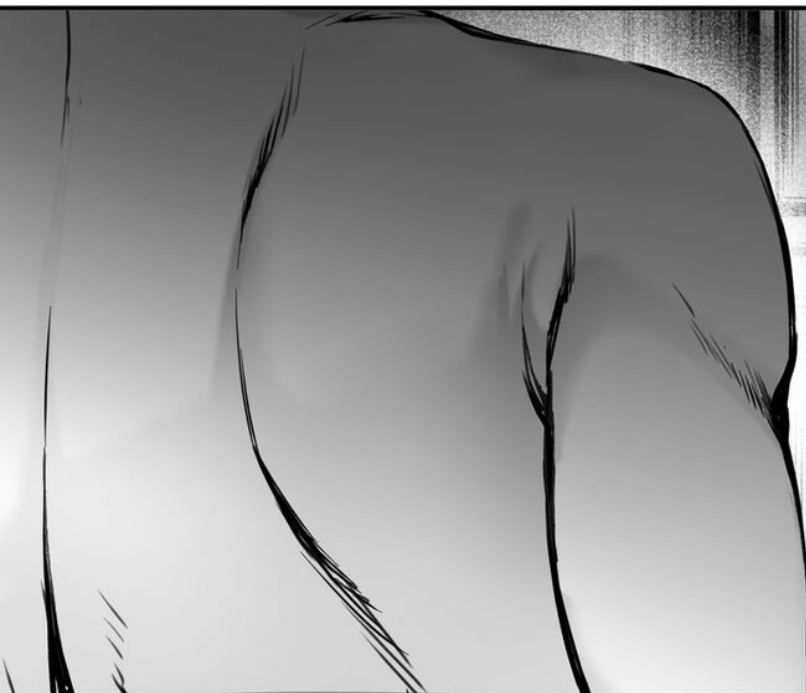


主の部屋の前には
今夜の担当である
5号が立っていた



彼女は私の選択に気づき
優しく微笑みかけてくれた





主は中で待っていた



契約書に
私の印を押し

服従のポーズを取り
宣言する

私 野崎はるなは人間を捨て
これからはご主人様の奴隷になります

どうか私を
ご主人様のものにしてください



うむ
ではこれから奴隷として
私に奉仕してくれ

はい
ご主人様

私はそれが当たり前かのように
四つん這いになり

ご主人様のそれに近づく...

ご主人様を気持ちよくする方法は
熟知している



私はご主人様が満足できるよう
精一杯ご奉仕する



よく勉強したね
ではここからは奴隷としての夜だ

今日は…ついに



ご主人様は満足してくれたようで
私の口にご褒美を注いだ

ご主人様の愛撫は
私の全てに触れ

この体の所有者が誰か
私の本能に訴えかける

抵抗する気も起きず
彼の指に委ね

快感に身を任せ

数え切れないほど絶頂させられた

私の体はもうご主人様のものだ

そして
やっと...

初夜が始まる

ずっと言いたかった言葉を
自分の口から言えた

この奴隷おまんこ

ご主人様のものにしてください

ご主人様が

私の膣内に入ってきます





私は雌の部分を
一瞬でさらけ出し

ご主人様は私の子宮を容赦なく突いた

挿入だけでイカされてしまった

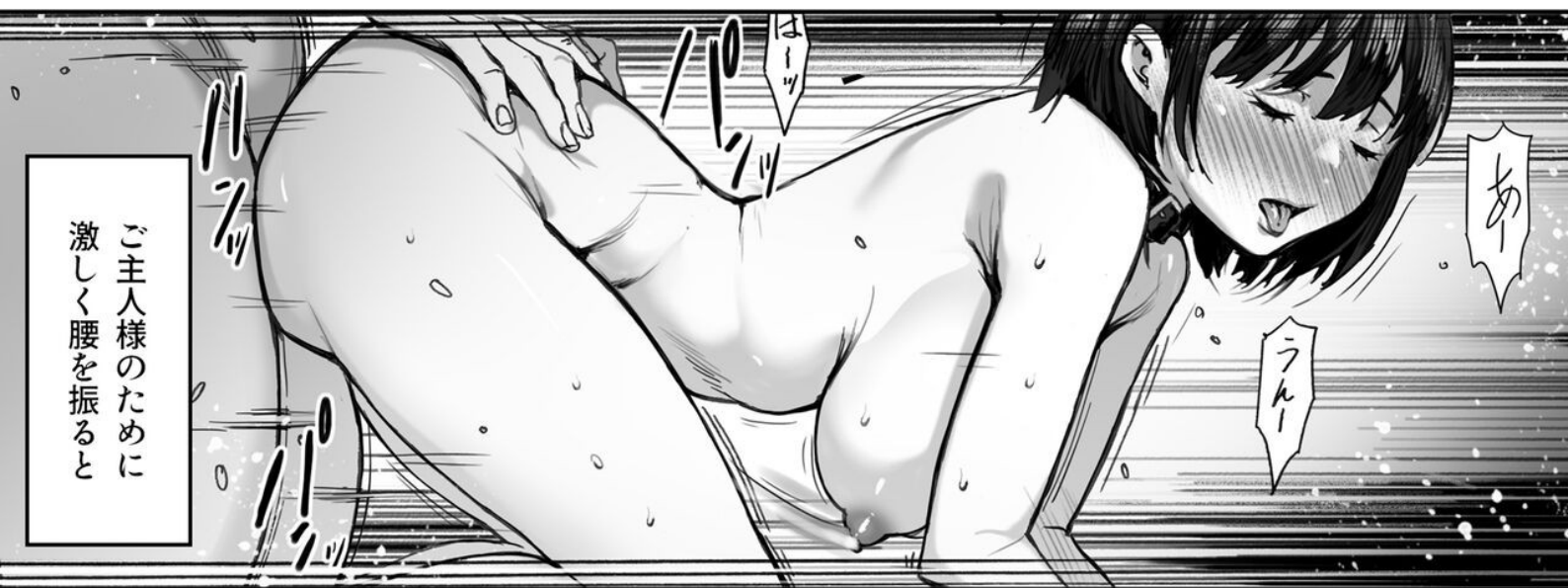


これが……奴隷セックス……

わわわわー！！

その後すぐに私はご主人様の
道具へと戻る

奴隷は
セックスの時も自分で動くべき



ご主人様のために
激しく腰を振ると



それに応えるように
ご主人様は私に快楽をくれる



私は何度イったか忘れるほど
交尾を繰り返し…



精液で子宮を満たすうちに実感した…

私はもう
この人の所有物なのだ――





ご主人様のモノが
完全に収まるまで
何度もセックスを続ける…



奴隷としての最初の夜は
朝日が昇るまで続いた





これからこの子も私たちの
一員になった

仲良くしてあげてくれ



十二



歓迎会の間
私に浴びせられる視線

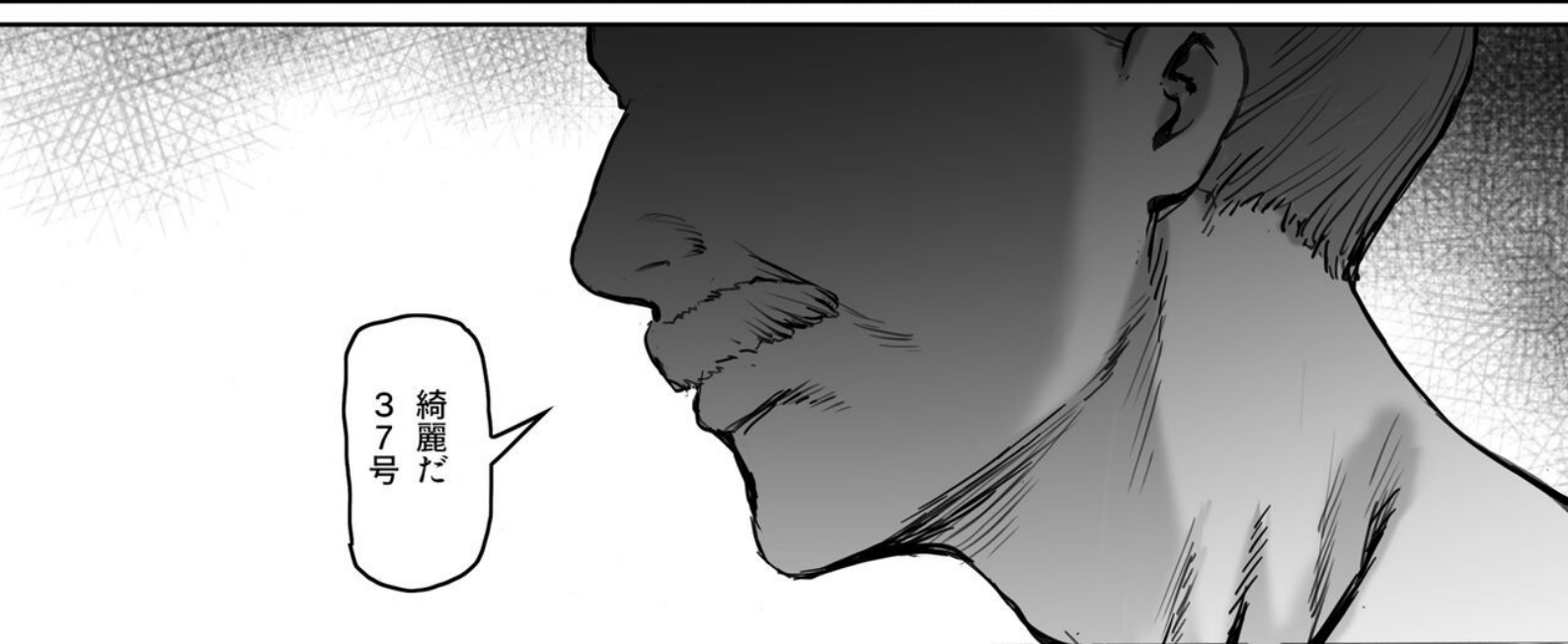
それは
羨望の眼差しだった



彼女達は
知っていたのだ

ふう



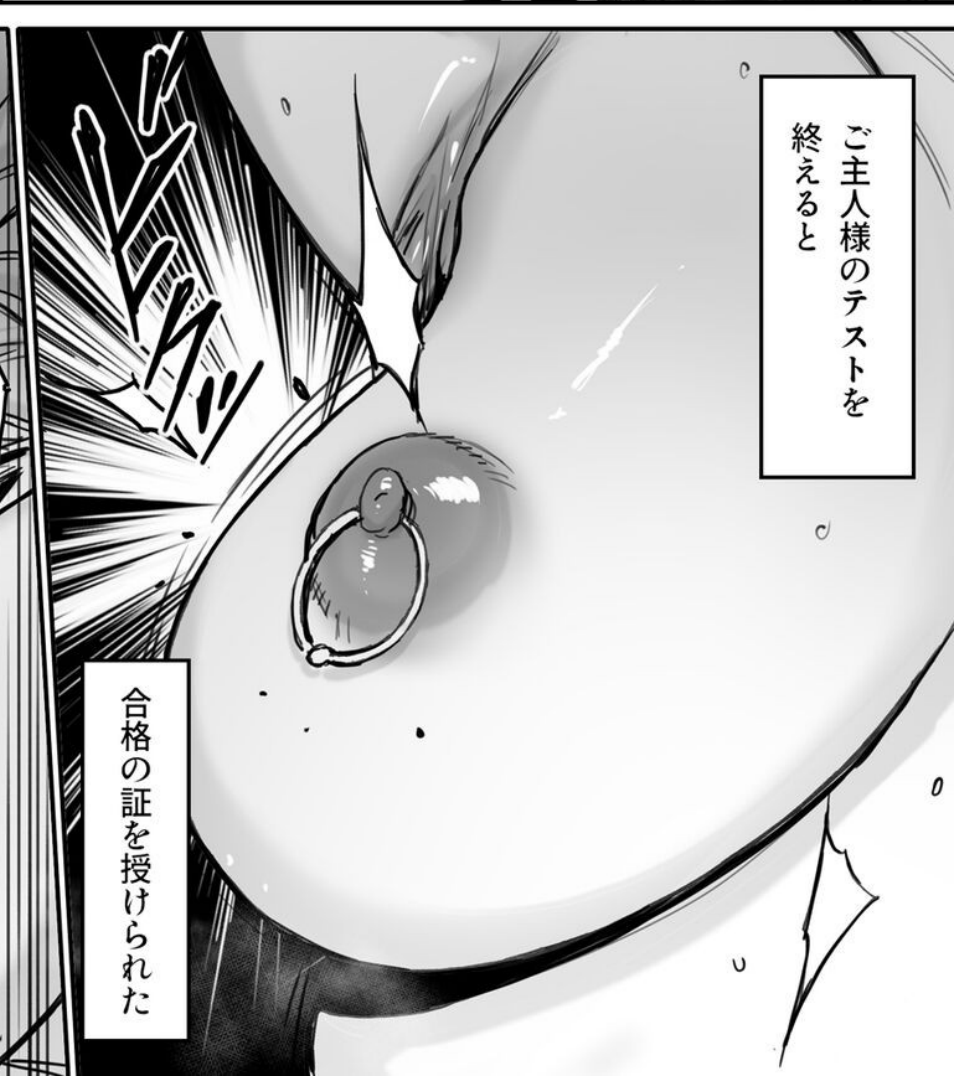


奴隷は
ご主人様の好みに
合わせて調教される

『私』が完成するまで
ご主人様はずっと
私と一緒にいる

何日にも渡る調教を
受けていく内に

ご主人様のすべてを
快感に感じるようになった



合格の証を授けられた

調教はさらに続き

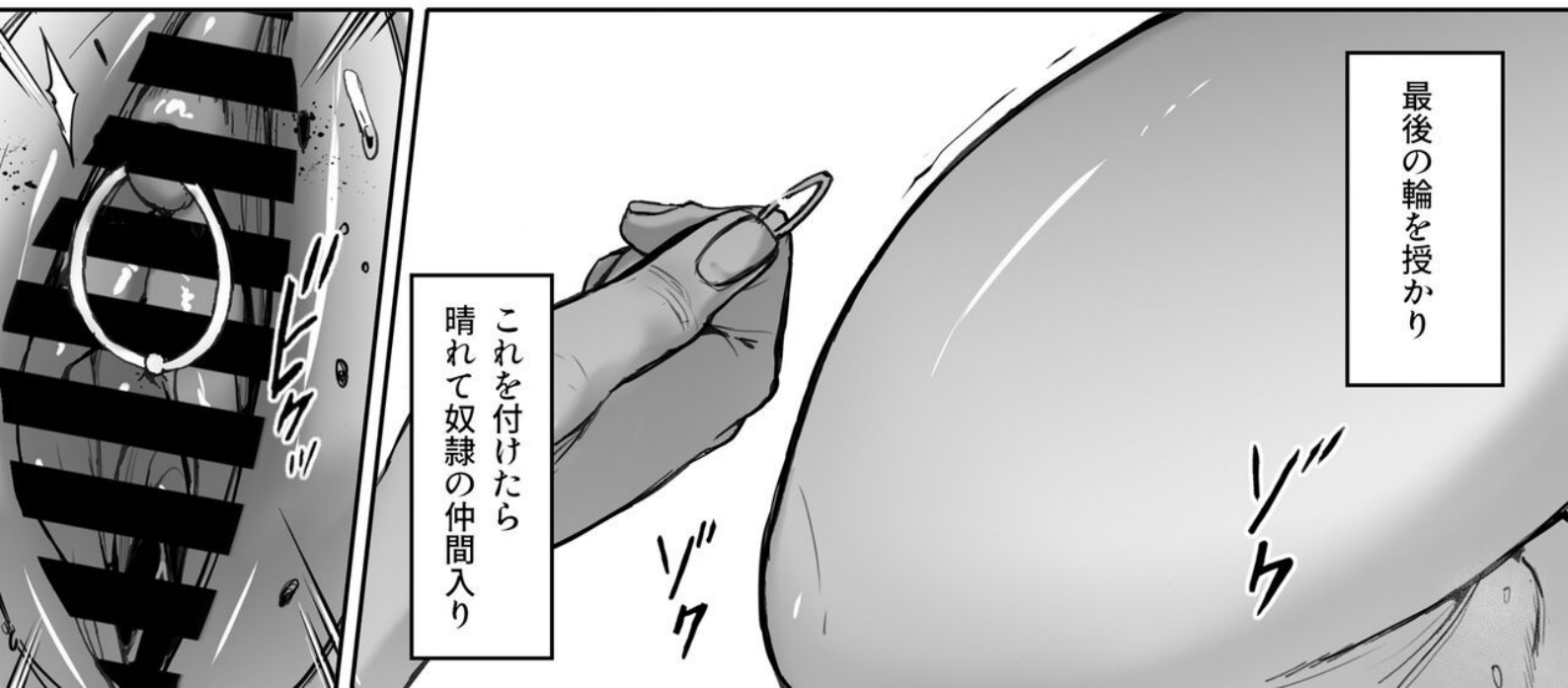
どんな命令でも
聞くようになり

人間の尊厳を
捨てる代わりに

獣のように
快感を感じるようになった

私の中の雌を
さらに目覚めさせるため

調教は続いていく



その後はみんなに
見られながら



ご主人様の子種を
奥に注がれる



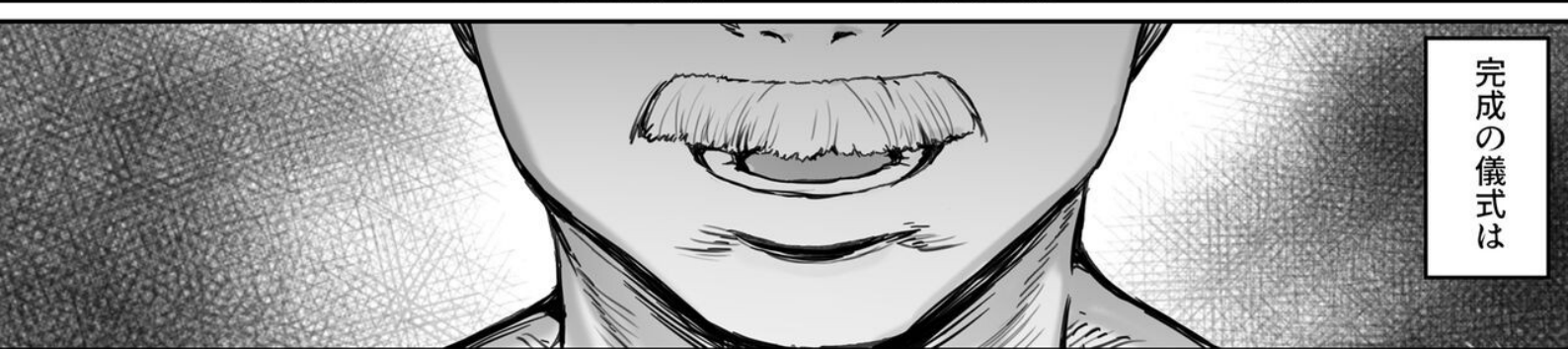
みんなの前で

自分のすべてを
見せびらかす

何度も繰り返し…

これからは
みんなと同じ





完成の儀式は



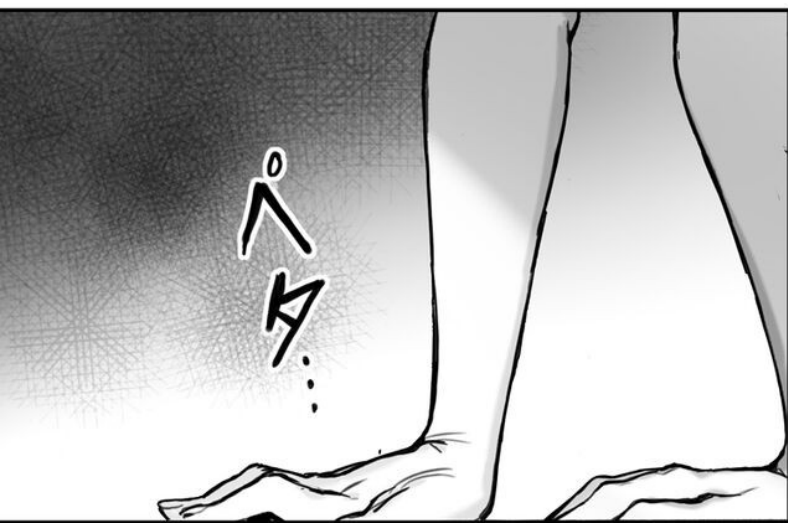
途中からみんなも
混ざりました







こうして
私は最高の一夜を過ごした



おはようございます
ご主人様

はあ
はあ



ふむ：頑張ってるな
これからはよろしく

37号



これが野崎はるなの最後
これからは奴隷37号として
生きる私の物語

ご主人様！

もし：
貴方も不思議なメールを
受け取ったら：



それは…天国への片道切符

是非返信して…

私たちが…

…迎えに行くから…

